

光村図書の教科書は

「百」聞は一見に如かず



大阪府立大学教授

張 麟声

「光村図書の教科書は一番良い」という言葉を日本語的に読むとたいへん良いが、中国語的に読むといまひとつになる。一方、「光村図書の教科書は十分に良い」という言葉は中国語的に読むとたいへん良いが、日本語的に読むとそれほどではない。このような両言語のユニークな「拮抗」は三回連載の一回目と二回目でそれぞれ述べたので、この三回目では円満な結末を目ざして不偏不党の言い方を取り上げる。

「光村図書の教科書は百聞は一見に如かず」という言葉は、中国語的に読んでも日本語的に読んでも、同様の意味になる。つまり、良いと聞いたが、実際にこの目で確かめてみると、聞いたよりもっとすばらしいのだということである。前の二回で取り上げた「一番」と「十分」は両言語の間で意味的にずれている例であったが、それはそれぞれの言語の中で別々に作り出されたためか、あるいは違うかたちで変容をとげた

ためであろう。一方、今回の「百聞」の意味に両言語の間でずれないのは、両言語とも「百聞不如一见」という中国の古い言葉をそのまま受け継いできたからである。

あれ、中国語とは別に日本語の中でも独自に漢語言葉を作っていたのかと首をひねる方がいるかもしれないが、それは間違いなくある。「百」の例でいうと、例えば「百鬼夜行」というのがそつである。中国語の鬼は人が死んでからなるもので夜にしか出てこないから、その感覚からすれば、「夜行」の「夜」はまったく不必要である。もつとも、わたしがなによりもまず直したいのは、「百日の説法屁一つ」の「屁」だ。この「屁」を助詞の「へ」にして、「百日の説法へ一つ」とすれば、すべてがだいなしにならず、少しは積極的な意味を持つではないか。しかし、この場合の「屁」の除去はまったくわたしの衛生感覚からの提案で、両言語の意味内容からの話ではないということは、「百も承知」のことである。

張 麟声（ちよう りんせい）

大阪府立大学人間社会学部教授。日中両国の言語、文化を比較という角度から研究。日本で出版された主な著書に、『日本語教育のための誤用分析 中国語話者の母語干渉 20例』、『スリーエネットワーク』、『日中言葉の漢ちがい』、『くろしお出版』などがある。現在、光村図書が発行する日本語教科書『新版中日交流標準日本語・初級』の編集委員を務める。